

【背景・目的】

公民館は社会教育施設のひとつである。戦後すぐに出された寺中作雄の公民館初期構想や1949年の社会教育法などによって全国に整備されてきた。しかし、1960年代頃からの住民運動の活発化などによって、住民自治の意識、活動の主体となる意識が高まり、公民館の目的であった生活の問題解決などの活動が公民館職員の指導や支援なしに住民たちだけの力で行えるという論調が出てきた。これに伴い、公民館不要論が叫ばれ、また1970年代頃のコミュニティセンターという職員の設置がない施設の登場により公民館や公民館職員のあり方というものが見直され始めるようになった。この問いは現在にも続いているものであり、様々な模索が進められている。その中で近年頻繁に公民館の方針の中にネットワーク・連携という言葉を見る。本論文の目的は社会の複雑化・多様化による課題に対して連携やネットワークづくりが重要視されていることについて、それがもたらすもの、ネットワーク・連携が公民館で行われる意義とは何であるのかを考察することが本論文の目的である。

【方法】

松本市の公民館についての文献調査とインタビュー調査である。インタビュー調査は福生市の公民館で長年活動されている方への半構造インタビューである。

【結果・考察】

松本市では「公民館の学びがつなぐ、松本らしい地域づくり、人づくり」という事業が行われ、景観講座では都市計画家、建築家などが、講師となって招かれており、交通講座では旅客運送業者、自然エネルギー講座では省エネやエネルギーの適正利用について様々な企業から報告者として招いていた。また工芸講座で愛知県に出向いたり、松本の職人さんと交流したりするなど、幅広い連携が見られた。この講座のアンケートでは、新しい発見をしたような感想を

多く見かけた。

インタビューでは主に次のことが語られた。

1 公民館におけるネットワークとは

ネットワーク・連携とはハード面ではなくソフト面として重要になることである。人と人がどうつながるか、学習者や職員がどう人脈をつくっていくのが大切ということである。

2 公民館の役割とは

公民館が機能するためには人が機能していなければならない。現代では昔と比べ情報というもの簡単に手に入ることができるようになった反面、視野が狭くなってしまっている。そのため現代には自分がよければすべてよし、と考える人が多くなっている。他人と学ぶ。これはとても重要なことであり、他人と意見を交わすことができる公民館は、教育機関から卒業した社会人にとって重要な場である。

3 公民館の活動に参加すること

インタビューした方は自身の公民館活動の中で女性問題から、歴史を学ぶことにつながり、人権への学び、そして国際社会に生きる構成員としての意識、平和への意識からドイツ国際平和村でのボランティア、ドイツ平和村をサポートする会での活動へと様々な経験を経てたどり着いた。自身の人生に影響を与えるものは多く考えられるが、公民館での学習はその中のひとつでもある。

【結論】

公民館のネットワークづくりとは人脈づくりであり、自分だけでは学べないことを学べるきっかけの場である。

つまりこうした公民館の学習は人々に新しい知識、新しい気づき、多様な価値観などをもたらす。こうした新たに学習者の人生に影響を与える可能性がある。もちろんそうした影響を与えるものは多くあるが、その中のひとつとして公民館があり、それは公民館での学習に意義があると考えられるだろう。